

学域横断的プロジェクト入門 2024

シラバス

授業の主題

この授業は、高校時代に培った、探究学習を始めとする、主体的かつ協働的な学びや経験を、発展的に、大学への学びと接続させることを目指す、グループワーク型の研究プロジェクトです。また、学域、学類を超えて集まった「多様な学生が切磋琢磨し相互に刺激を与えながら成長する場」として研究プロジェクトを位置づけ、多様な視点を交差、交流させることから得られる学知や経験を重視します。この授業を通して、今後の専門教育の土台の一つを築くことを目指します。

学修目標（到達目標）

1. 受講生が、高校での学びと大学での学びの質的な連続性と相違点を自覚することができるようになる
2. 受講生が、グループワークを通して、研究の分担や協力などの基本的な作法を身に付ける
3. 受講生が、他のグループの研究発表に興味関心をもち、主体的、積極的に、質問やコメントができるようになる
4. 受講生が、質の高い研究プロジェクトにするための条件について、自ら考えられるようになる
5. 受講生が、グループ内で共通する問題意識について議論し、それを一つに集約し、言語化できるようになる
6. 受講生が、問題意識を、検証可能なリサーチクエッションに変換できるようになり、また、リサーチクエッションや選択した対象に適した、先行研究や資料を探すことができるようになる
7. 受講生が、選択した対象に適した、ディシプリンや検証方法について考えることができるようになる
8. 受講生が、グループ内またはクラス内発表などを通して、自分（たち）の研究上の問題点を自覚し、それを修正する態度を身に付けられるようになる

授業概要

学域、学類を超えて編成されるグループにおいて、課題発見から課題解決にいたる一連のプロセスを経験します 1. 高校での探究学習を共有する 2. グループ全員が興味をもつことができるテーマを探し出し、リサーチプロポーザル（リサーチクエッション、先行研究、研究方法など）を執筆する 3. リサーチプロポーザルにもとづく、プレゼンテーションを実施する

評価の割合

- ・リサーチプロポーザル（レポート形式） 30%
 - ・プレゼンテーション（スライド資料） 20%
 - ・毎回の授業課題（予習・復習） 30%
 - ・受講態度（グループへの貢献度を含む） 20%
- ※授業には3分の2以上の出席を必要とします - ※評価基準は、授業目標に準じます

教科書・参考書補足

参考書

1. 戸田山和久『最新版 論文の教室：レポートから卒論まで』（NHKブックス、2022年）
2. ジョン・モーリー（高橋さきの訳・国枝哲夫監訳）『アカデミック・フレーズバンク：そのまま使える！構文200・文例1900』（講談社、2022年）

適宜、授業内で配布します。

予習に関する指示

グループワークまたはリサーチプロポーザルに必要な文献を適宜配布します。授業までに読み、指示に応じて、まとめてください（目安1時間）。

復習に関する指示

毎回の授業内容に合わせて、授業時間外のグループワークが必要です。進捗を確認できる資料を用意してください（目安1時間）。

II. シラバス

2. 授業の主題

この授業は、高校時代に培った、探究学習を始めとする、主体的かつ協働的な学びや経験を、発展的に、**大学への学びと接続させる**ことを目指す、グループワーク型の研究プロジェクトです。

学域、学類を超えて集まった「多様な学生が切磋琢磨し相互に刺激を与えながら成長する場」として研究プロジェクトを位置づけ、多様な視点を交差、交流させることから得られる学知や経験を重視します。

この授業を通して、今後の専門教育の土台の一つを築くことを目指します。

キーワード

1. Project Based Learning (PBL)

- 「問題解決型学習」型授業
 - 学修者自身の**問題意識**と**主体性**を重視

1. 高大接続

2. グループワーク
3. アカデミックライティング

3. 学修目標（到達目標）

Note | 到達目標の基本的な考え方

1. 「受講生が〇〇できる」という表現に注意してください
 2. 学修目標（到達目標）と成績評価基準は連動しています
1. 受講生が、高校と大学の学びの**質的な連続性と相違点**を自覚することができるようになる
 2. 受講生が、グループワークを通して、研究の分担や協力などの基本的な作法を身に付ける
 3. 受講生が、他のグループの研究発表に興味関心をもち、主体的、積極的に、質問やコメントができるようになる
 4. 受講生が、質の高い研究プロジェクトにするための条件について、自ら考えられるようになる
 5. 受講生が、グループ内で共通する問題意識について議論し、それを一つに集約し、言語化できるようになる
 6. 受講生が、**問題意識を、検証可能なリサーチクエッションに変換**できるようになり、また、リサーチクエッションや選択した対象に適した、先行研究や資料を探ることができるようになる

7. 受講生が、選択した対象に適した、ディシプリンや検証方法について考えることができるようになる
8. 受講生が、グループ内またはクラス内発表などを通して、自分（たち）の研究上の問題点を自覚し、それを修正する態度を身に付けられるようになる

4. 授業概要

学域、学類を超えて編成されるグループにおいて、課題発見から課題解決にいたる一連のプロセスを経験します

1. 高校での探究学習を共有する
2. **グループ全員が興味をもつことができるテーマを探し出し**、リサーチプロポーザル（リサーチクエッション、先行研究、研究方法など）を執筆する
3. **リサーチプロポーザル**にもとづく、プレゼンテーションを実施する

・注：分析や実験など、**論証はおこないません**

5. 成績評価

配点（内訳）

項目	配点
リサーチプロポーザル（レポート形式）	30%
プレゼンテーション（スライド資料）	20%
毎回の授業課題（予習・復習）	30%
受講態度（グループへの貢献度を含む）	20%

重要

- ・授業には3分の2以上の出席を必要とします
- ・評価基準は、授業目標に準じます

単位についての考え方

Note | 予習復習も単位取得に必要な時間です

- ・授業出席時間だけでは、単位取得時間を満たしません
- ・学修の観点だけでなく、大学制度上、予習復習は必須です

1単位＝45時間の学修の考え方（「大学設置基準」）

我が国の大学教育は単位制度を基本としており、1単位あたり45時間の学修を必要とする内容をもって構成することが標準とされています。ここでいう1単位あたりの学修時間は、授業時間内の学修時間だけでなく、その授業の事前の準備学修・事後の準備復習を合わせたものとなっています（@MEXT_University_credits）

1単位8週間の授業の場合

- ・45時間の学修を要し、うち1/3の12時間が授業時間
- ・残りの**33時間が授業外での学修時間**となる
 - 慣例的に概算計算される

予習・復習に関する指示

予習

- グループワークまたはリサーチプロポーザルに必要な文献を適宜配布します
- 授業までに読み、指示に応じて、まとめてください

復習

- 授業内容に関する感想を提出してください
- 毎回の授業内容に合わせて、授業時間外のグループワークが必要です（進捗を確認できる資料を用意してください）

Note | 予習・復習時間の目安

- どちらも1時間

8. 教科書・参考書補足

参考書

1. 戸田山和久『最新版 論文の教室：レポートから卒論まで』（NHKブックス、2022年）
 2. ジョン・モーリー（高橋さきの訳・国枝哲夫監訳）『アカデミック・フレーズバンク：そのまま使える！構文200・文例1900』（講談社、2022年）
- 適宜、授業内で配布します。

7. オフィスアワー等

学生からの質問への対応方法等

- 随時、対応します
- 授業の際、またはメールによる事前連絡にて、日時を調整します（教員のメールアドレス、研究室は別紙参照）

References

引用文献